

## 大友敏明教授記念号に寄せて

この3月、大友敏明先生はご定年を迎えられました。大友先生がこれまで立教大学の研究・教育活動に多大なるご貢献をいただきましたことに心から感謝申し上げ、経済学研究会はここに『立教経済学研究』の月号を「大友敏明教授記念号」として上梓いたします。

大友敏明先生は、2008年4月に立教大学経済学部教授として着任され、2019年3月にご退職されるまで、学問の府としての立教大学の発展に大きく貢献されました。この間、2015年から経済学研究会幹事会座長を務められ、本誌のPDF化と機関リポジトリでの公開にご尽力されました。本誌は『立教大学経済学会雑誌』『立教大学経済学会報』『立教大学経済学会会誌』『商学論叢』の関連・後継誌ですが、これら4誌にまで遡られて執筆者別に論文を整理され、現役の教員だけでなく、卒業生や退職者を含む膨大な執筆者からネット公開について承諾を取り付ける、実に面倒な作業の陣頭指揮をとられました。今でこそ紀要のネット公開は当たり前となっておりますが、当時は著作権等の解決すべき問題が山積していました。前任校山梨大学で図書館長を務められ、山梨医科大学との統合と法人化の際に蔵書の構築に携われたご経験が活かされたものと拝察しております。2017年からは経済研究所長も務められ、「経済研究所規則」の改正に着手されました。現在、経済研究所では、3つの研究プロジェクト（調査及び研究、受託・共同研究）と4つのワークショップが行なわれています。これは、大友先生が後進の研究者にとって申請しやすいように研究種別を整備された賜物です。また、2017年3月に「思想のちから、古典のちから」、2018年3月には「ヨーロッパの統合と分化 - ドイツ・フランス・イギリス」と題した2つの学術研究大会を主催されました。

大友敏明先生は、経済学部においては、経済学、経済原論A、そして社会経済学1・2を担当され、大学院経済学研究科では流通・分配特論1・2と流通・分配論を担当されました。学部のゼミナール、大学院博士課程前期課程の演習特別指導・後期課程の特殊研究指導を通して多くの学生・大学院生に理論的に考えることの楽しさと大切さを伝えてこられました。

大友敏明先生のご研究の中心は信用理論にあることはいまでもありませんが、その系譜を辿られるなど、ご研究の領域は多岐にわたっています。大友先生は、1977年3月に早稲田大学教育学部を卒業され、慶應義塾大学大学院経済学研究科前期博士課程、同大学院後期博士課程に進まれ、信用理論の泰斗である飯田裕康先生の下で研鑽を積まれました。それに飽き足らず学外の杉山忠平先生（一橋大学）、小林昇先生（立教大学）、羽鳥卓也先生（岡山大学）、中村廣治先生（広島大学）に指導を仰がれ、ステュアート（J. D. Steuart）、リカードウ（D. Ricardo）、

ミル (J. S. Mill) らの英国の古典派経済学の理論を研究されました。その研究成果は、早くも1980年代前半に『三田学会雑誌』に発表された一連の再生産論の成立史研究、すなわち「マルクス『経済表』の構造と意義」、「アダム・スミスにおける二つの経済循環 再生産と通貨・信用構造」、「ステュアート『原理』における経済循環の把握について」に如実に表われています。これらは、『資本論』の草稿を素材にして始められた再生産論を、マルクス経済学を越えて経済学説史と扱うという壮大な研究構想に基づいた業績です。

その後、大友先生は、再生産論と信用との関連に焦点を当てられ、古典派経済学から重商主義期の経済学へと研究を進められて、大著『信用理論史』(慶應義塾大学出版会)を纏められました。同書では、重商主義期からの銀行学派と通貨学派の対立と論争が網羅され、体系的に叙述されています。前者はロー (J. Law) を嚆矢としてステュアート、スミス (A. Smith) を経てトゥック (T. Tooke)、フラートン (J. Fullarton) と流れる系譜で、後者はとロック (J. Locke) からカンティロン (R. Cantillon)、ヒューム (D. Hume) を経てソーントン (H. Thornton)、リカードウと流れる系譜であり、分裂し対立する諸学説の一方に加担されることなく、虚心坦懐にその本来的な形態を明らかにするという研究姿勢が貫かれており、斯学において名著として高く評価されています。そこでは、再生産と信用との関連に基づいて、金属貨幣説 vs 名目説、数量説 vs 反数量説、銀行券の信用貨幣としての把握 vs 銀行券の通貨としての把握、という二項対立が基軸に据えられて、対立の生成要因を分析されています。

2010年代からは、大友先生は、貨幣制度と国家に関する問題にも取り組まれており、反通貨管理の思想、利子生み資本の蓄積、中央銀行の独立性等についての研究成果を欧州経済学史学会 (The European Society for the History of Economic Thought) 等において次々と発表されています。

最後に私事にわたりますが、会計ファイナンス学科に所属している私が、なぜ2012年から学科を超えて経済学科長に就くことができたのかというと、大友先生の代役として及ばずながら起用していただいたに過ぎません。本来役職に就くことを囑望されていた大友先生は、ケンブリッジ大学での在外研究を強くご希望になられ、当時の池上岳彦学部長からの要請を固辞されたのです。しかし、大友先生は、ご帰国後は経済学研究会幹事会座長、研究体制検討委員会座長、経済研究所長として、後進の研究者のために、学科長以上のお仕事をされてきたことはいうまでもありません。大友先生の視座が広く、ご研究を強靱に推進されるお姿を目の当たりにして、私どもは引き続きご指導いただくことを偏へにお願いする次第です。

大友敏明先生がこれからもご健勝でますますご活躍されることを祈念いたしまして、本記念号の発刊の辞に代えさせていただきます。

2019年11月

経済学部長 内野 一樹